佐々修辞理論研究

——カレント・トラディショナル・レトリックにおける位置づけ——

柳沢浩哉

1. はじめに

明治から大正にかけて，我が国では西洋修辞学を受容しようとする試みが数多くなされたが，当時我が国で作られた修辞理論は，演説を目的とするものか，美文の作成を目的とするものかのいずれかであった。これは，当時作られた修辞理論のほとんどが，演説または美文の作成を目的とする，18世紀イギリスの修辞理論に依拠していたためにおきた現象であるが，そのような趨勢の中で，我が国の西洋修辞学受容史の中では末期に位置する佐々政一[1)]（さっさ　まさかず 1872～1917）だけは，19世紀アメリカのカレント・トラディショナル・レトリック（Current Traditional Rhetoric）（これについては後述する）と呼ばれる修辞学をもとにした独自の修辞理論を展開している。依拠している修辞理論の違いは当然その理論にも影響し，佐々修辞理論では演説・美文などに比べ，より基本的な言語技術の習得，すなわち，正確な伝達が主な目的とされている。このような特徴を持つ佐々修辞理論は作文教育への西洋修辞学の応用を考える上でも興味深いものであろう。

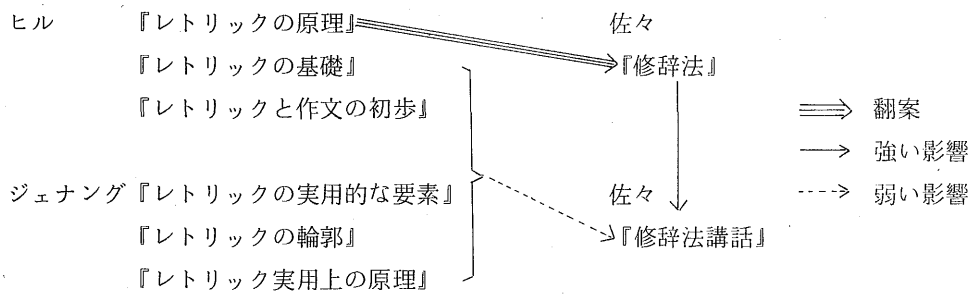
佐々修辞理論については，二・三の先行研究を数えることができるが，[2)]それらの先行研究はいずれも，佐々修辞理論を我が国の西洋修辞学受容史の中に位置づけようとしたものである。しかし，佐々修辞理論は我が国の西洋修辞学受容史の中では特異な存在であるため，その位置づけは困難であると同時に，佐々修辞理論の性格を理解する上であまり重要な意味を持たないと考えられる。佐々修辞理論の性格を理解するためには，むしろ，カレント・トラディショナル・レトリックにおける位置づけを知ることのほうが重要であろう。このため，本稿では，佐々修辞理論とそのもととなったアメリカの修辞理論との比較を手掛りに，佐々修辞理論をカレント・トラディショナル・レトリックの中に位置づけることを試みる。

2. 佐々が依拠している修辞学書

佐々の修辞理論は，アメリカの修辞学者ヒル（Hill, Adams Sherman）の理論をもとにしたものであるが，佐々は明治34年に，ヒルの『レトリックの原理』（Principls of Rhetoric, 1878）を翻訳し，『修辞法』として出版している。これが，佐々の最初の修辞学書であるが，その後，佐々は，『修辞法』をもとに彼の独自の修辞理論を展開させた『修辞法講話』を大正6年に出版している。また，佐々は，大正5年から6年にかけて，『修辞法講話』以外に三冊の修辞学書を出版しているが，[3)]それらはいずれも『修辞法講話』のための習作，あるいは補足と考えられるものであり，『修辞法講話』が佐々修辞理論の集大成であると言うことができる。（本稿で

は，便宜上，『修辞法講話』に述べられている理論を「佐々修辞理論」，『レトリックの原理』に述べられている理論を「ヒル修辞理論」と呼ぶことにする。)

『修辞法講話』に関して佐々は，『レトリックの原理』以外に，ヒルの修辞学書を二冊と，ヒルと同じくカレント・トラディショナル・レトリックに属する，アメリカの修辞学者ジェナング(Genung, John Franklin)の修辞学書を三冊参照しているが，ここで参照しているヒルとジェナングの修辞学書について，佐々は書名を明らかにしていない。ヒル，ジェナングとも，五・六冊の修辞学書を著しており，『修辞法講話』を書くに当って佐々が参照したものを類推することは困難であるが，ヒルについては，『レトリックの原理』と並んでヒルの代表作である『レトリックの基礎』(Foundation of Rhetoric,1892)と，『レトリックと作文の基礎』(Beginning of Rhetoric and Composition, 1902)を，ジェナングについては彼の代表作である『レトリックの実用的な要素』(Practical Elements of Rhetoric, 1893)と，『レトリックの輪郭』(Outlins of Rhetoric, 1894)，『レトリックの実用上の原理』(Working Principls of Rhetoric, 1902)を原典として使用した。これらの著書の中には，ヒル，ジェナングそれぞれの修辞理論の特徴がほとんど現れており，「佐々修辞理論」の特徴を考察する上で特に問題はないものと思われる。これらの関係を図示すると次のようになる。



本稿では，これらの原典を用いて「佐々修辞理論」の特徴を明らかにし，その結果をもとに「佐々修辞理論」をカレント・トラディショナル・レトリックの中に位置づけることを目的とする。

3. ヒルの修辞理論とジェナングの修辞理論の特徴

19世紀のアメリカの修辞学は一般にカレント・トラディショナル・レトリックと呼ばれるが，この名称にはこの修辞学の特徴が良く表現されている。アメリカでは19世紀に入り修辞学研究が盛んになるが，アメリカの修辞学は18世紀イギリスの修辞学をもとにしたものであり，ここで言うトラディショナル・レトリック(伝統的修辞学)とは，18世紀イギリスの修辞学のことである。18世紀イギリスは近代レトリックが頂点に達した時期と言われ，修辞学が非常に発展した時代であったが，話者と聴者の内面を重視したその理論は複雑かつ難解であり，レトリック本来の目的である教育には不向きな理論であった。このため，19世紀アメリカでのレトリック研究はトラディショナル・レトリックを簡略化し，教育に供する理論とすることに主眼が置かれてお

り，これが，19世紀アメリカの修辞学がカレント（通俗化）と呼ばれるゆえんである。つまり，カレント・トラディショナル・レトリックとは18世紀イギリスの修辞学を通俗化した修辞学であり，装飾的要素を排す，エロクーティオー[4]を重視するなど，18世紀イギリスの修辞学の基本的な特徴がそのまま受け継がれている。カレント・トラディショナル・レトリックはその後，パラグラフ論，キーセンテンスなど「配置」に関する分野で独自の発達も見せるが，19世紀末から20世紀初頭にかけて大きな転換期を迎える。

19世紀後半のアメリカでは，伝統的なカリキュラムに批判的な人間主義（humanism）の人々と，伝統的なカリキュラムを擁護しようとする自然主義（naturalism）の人々との対立が生じていたが，その対立も19世紀末になると人間主義者が次第に優位に立ち，1890年代には人間主義者による，カリキュラムの広範な改革が行われていた。レトリックは当時の伝統的なカリキュラムの中心的な位置にあった学科であり，19世紀末はレトリックが人間主義者による攻撃の矢面に立たされていた時期なのである。このため，20世紀に入るとアメリカの修辞学は大きな変容を見せ，20世紀アメリカの修辞学は，一般にはレトリックと呼ばれずに，コンポジションと呼ばれるようになる。カレント・トラディショナル・レトリックが大きな変容を見せるこの19世紀末が，ヒルとジェナングの活躍した時期であり，ヒルとジェナングを最後に，アメリカのレトリックはコンポジションに移行すると言われる。[5]当然，彼らの修辞理論にはコンポジションに通じる特徴も見られ，彼等の修辞理論はコンポジションとカレント・トラディショナル・レトリックとの対立の中で位置づける必要があろう。

コンポジションを一言で言えば，レトリックに比べ，より基本的な表現を対象とする言語技術ということになる。コンポジションとカレント・トラディショナル・レトリックが主に扱っている範囲はどちらも，「文法」（正確な表現を行うために，レトリックでは伝統的に文法を扱っている），「構想」，エロクーティオー，「配置」の四つであるが，その内容にはいくつかの違いが見られる。カレント・トラディショナル・レトリックと比べた場合のコンポジションの主な特徴を箇条書きにして次に挙げてみよう。

- カレント・トラディショナル・レトリックでは話し言葉と書き言葉の両方を扱っていたのに対し，コンポジションでは書き言葉のみを扱う。
- 表現のための技術が重視されたが，その技術を導き出すための理論は軽視された。
- それまでのレトリックで扱われることのなかった句読点（ピリオド・カンマ等の用法）が重視される。
- 「文章の種類」（kinds of composition）（これについては後述する）に関する考察が重視される。
- 練習・模倣が重視される。

これらの特徴から，コンポジションの方が実用的なものであったことが分かるが，コンポジションとカレント・トラディショナル・レトリックとの根本的な違いは，さらに別な部分，両者の対象の違いにある。すなわち，カレント・トラディショナル・レトリックが表現する対象として書き手（話者）の思想を扱っていたのに対し，コンポジションでは，書き手の外側にある，事件・

事物・人物などをその対象として扱っていた点に，コンポジションの最大の特徴が見られるのである。その結果，カレント・トラディショナル・レトリックも含め，伝統的なレトリックの中心にあった説得という目的が薄れ，コンポジションでは正確な伝達が第一の目的になったのである。先に箇条書きで示したカレント・トラディショナル・レトリックとコンポジションとの違いは，この目的の変化から生じたものであり，更にコンポジションには内容面で次のような特徴が加わることになる。

・描く対象（人物や事物）の観察が重視される。

・読者に合わせるという配慮が必要なくなるため，読者のウェートが軽くなる。

コンポジションとカレント・トラディショナル・レトリックとのこの様な違いを理解した上で，ヒルとジェナングの修辞理論の特徴を考えてみたい。

「ヒル修辞理論」では「文法」・「スタイル」・「文章の種類」という，カレント・トラディショナル・レトリックに一般的に見られる構成が取られているが，その内容には，対象を書き言葉のみに制限したこと，文法的考察の重視，練習の重視など一般のカレント・トラディショナル・レトリックとは異なったいくつかの特徴が見られる。これらの中でも，書き言葉のみを対象としていることが「ヒル修辞理論」の最大の特徴であり，カレント・トラディショナル・レトリックでも，話し言葉のウェートは次第に小さくなっていったが，対象を書き言葉のみに制限したのは，カレント・トラディショナル・レトリックの中でヒルが最初である。[6] また，文章の効果を得るための方法としてヒルは構文論的な方法にたよっているが，これも他のカレント・トラディショナル・レトリックには見られない特徴で，ヒルはその修辞理論の中で構文論的な厳密さを追求したために，当時，「ヒル修辞理論」は「べからず集」であるという批判を受けている。[7] 更に，ヒルは理論的な考察よりは，むしろ，練習・模倣を重視し，その修辞理論では数多くの例文が引用されている。当時のカレント・トラディショナル・レトリックでも練習は重視されていたが，ヒルほど数多くの例文を引用しているものは珍しく，また，例文として本格的に文学作品を使用したのは，カレント・トラディショナル・レトリックではヒルが最初であると言われている。[8]

これらの特徴が，ヒルの修辞理論がコンポジションに近いものであることを意味しているのは明らかであろう。すなわち，ヒルの修辞理論はカレント・トラディショナル・レトリックからコンポジションへの過渡期の理論なのである。当時のレトリックが人間主義者から攻撃を受けていたことは既に述べたとおりであり，この様な時代背景の中で，ヒルも従来のカレント・トラディショナル・レトリックになんらかの改良を加えることを余儀なくされていたわけで，「ヒル修辞理論」のこの様な特徴は，当時の人間主義者に対する，ヒルの解答であると見ることができる。ただし，ヒルの修辞理論はあくまでカレント・トラディショナル・レトリックの理論としての特徴の方が強く，それは「スタイル」の重視に強く現れている。この点は，「佐々修辞理論」の性格を考える上で重要なポイントとなるものであり，後でもう一度考えてみたい。

ジェナングの修辞理論も全体の構成はヒルと同様であるが，「ヒル修辞理論」に比べるとカレント・トラディショナル・レトリックの特徴をより強く残しており，たとえば，書き言葉とても

に弁論（話し言葉）もその対象として扱っている点，技術とともにその技術を導き出す理論も重視している点，更に，読者の心理的な面にも注意を払っている点などに，従来のカレント・トラディショナル・レトリックの特徴が見られる。また，ジェナングは「構想」を重視しているが，その「構想」で述べられているのは，コンポジションの「構想」に見られるような観察法ではなく，テーマの決定の方法・テーマの展開の方法・材料の並べ方など伝統的な「構想」での方法である。これらの多くは，説得力のある表現を作るために必要とされる技術であり，描写のための技術を扱っている「ヒル修辞理論」とはその性格を異にしていることが分かる。しかし，一方でジェナングは彼がたびたび強調しているように実用性（practical）を重視しているため，伝統的な修辞理論に比べ，理論の省略・簡略化が数多く見られるとともに，例文，練習問題が随所に取り入れられているが，これらの特徴は，コンポジションと共通するものである。つまり，ジェナングの修辞理論も基本的にはヒルのものと同様に，カレント・トラディショナル・レトリックからコンポジションへの過渡期の理論であるが，ヒルに比べるとカレント・トラディショナル・レトリックの特徴をより強く残している理論なのである。

4. 「佐々修辞理論」の特徴

「佐々修辞理論」は全体の構成が，「文法」・「スタイル」・「文章の種類」の三つに分かれており，それぞれの内容は，ほぼ次のようなものである。（「ヒル修辞理論」でも大まかな内容は同じである。）

文　法 ――― 使用すべき語彙の範囲と，文法的な誤り（破格）について述べる。

スタイル[9] ――― 効果的な文章を明晰・強勁・流暢の三つの要素から規定し，それぞれの要素を得る方法を，主に構文論の面から論ずる。

文章の種類 ――― 文章を，目的と描く対象によって四種類に分け，それぞれの文章に応じて，対象の観察法・描写法を述べる。

本稿ではこのうち，「スタイル」と「文章の種類」から，「佐々修辞理論」のカレント・トラディショナル・レトリックにおける位置づけを，「ヒル修辞理論」と比較しながら考察してみたい。[10]

① スタイル

「スタイル」は，効果的な文章に必要な要素について考察する分野であり，西洋修辞学では古くから論じられている伝統的なテーマである。一般には，効果的な文章に必要な要素を三つから五つほど規定し（それぞれの要素は virtue（文章の徳目）と呼ばれる。），それぞれの virtue をを得るための方法を論じるという形式が取られ，「ヒル修辞理論」でも，clearness（明晰さ），force（力強さ），ease（流暢さ）の三つの virtue を規定している。この三つの virtue は西洋修辞学において普通に見られるものであるが，それぞれの virtue を得る方法についてヒルは，語彙の選択と構文論との二面からかなり具体的な考察を行っている。「スタイル」を構文論によって論じているのは，西洋修辞学の中でも特殊な例であるが，その結果，「ヒル修辞理論」での「スタイル」は複雑な構文論的注意の羅列になってしまっている。「ヒル修辞理論」が文法的厳密さを重視した結果，「べからず集」という批判を受けたことは既に述べたとおりであるが，この批

判は主に「スタイル」に向けられたものである。「ヒル修辞理論」の「スタイル」は，これだけでも複雑なのであるが，これに各 virtueの対立関係に関する考察が加わり拍車をかけている。すなわち，三つの virtueはともに並立することができず，一つを優先すれば他の一つが必ず犠牲になる関係にあり，「ヒル修辞理論」ではこの関係の考察にかなりのスペースが割かれているのである。[11)]

「佐々修辞理論」でも，「ヒル修辞理論」と同様に，「スタイル」では複雑な構文論的考察が続くが，「ヒル修辞理論」と比べてみると，かなりの省略・簡略化が行われていることが分かる。特に，virtue の対立関係に関しては次のように述べ，その優先順位を示すことで，virtueの複雑な対立関係に関する考察の多くを省略している。

> 更にこの比喩を用いれば，道路の第一の必要条件は平坦であるが如く，文章の第一の条件は明晰である。しかし，道路の彼方に都会や名所などがある場合には，足場の悪い山路でも通行人がいないではない。これはあたかも遒勁であるために，多少明晰を欠いても，文章の用をなすに似ている。[12)]

> 文章は明晰で遒勁であれば，ほとんど実用の目的は達せられると言ってよい。故に初学者はこの二条件を先ず十分に注意せしめねばならぬ。流暢というのは実は最後の条件である。[13)]

佐々が彼の修辞理論を作るに当たっては，「ヒル修辞理論」を日本語に適合させること，「ヒル修辞理論」を整理（あるいは補強）することの二点から変更が加えられているが，『修辞法講話』以前に書かれた『修辞法』にはこの両方の処置は見られず，『修辞法』では，文法構造の違いなどによって，日本語に適合出来ない部分だけが変更されている。このため，「ヒル修辞理論」を整理するという，積極的な理論の変更の跡は，『修辞法』と『修辞法講話』との比較によって知ることができる。

「スタイル」に関して『修辞法』と『修辞法講話』を比較すると，『修辞法講話』において見られた細かい変更は『修辞法』においてもある程度見られるが，virtue の対立関係についての考察は『修辞法』では省略されておらず，日本語に適合するように翻案されている。この点から，その部分の省略は　日本語に適合させるために行われた消極的なものではなく，理論の簡略化という明確な意図のもとに行われた処置であることが分かる。virtue について，それぞれの対立関係は論じずに，clearness,force,ease という優先すべき順位のみ定めているのはジェナングの修辞理論に見られる形であり，[14)]佐々のこの処置にはジェナングの影響が大きいものと考えられる。

また，佐々はここに挙げた三つの virtue 以外に「統一」というもう一つの virtueを挙げ，「不統一は明晰，遒勁，流暢のいずれの条件にも障壁をなすものである。[15)]」と述べて，他の三つの virtue よりも重要な位置を与えているが，これに対し，「ヒル修辞理論」では「統一」を文章に必要な要素とはしているものの，virtue には入れておらず，virtue よりも下のランクで扱っている。ヒルと佐々の「統一」についての違いは，「統一」に関する両者の捉え方の違いによるものである。「ヒル修辞理論」では，「統一」を内容（substance）と表現形式（expression）の二面から捉え，特にヒルは表現形式における統一を重視しており，また，統一すべき単位として専ら

文を考えているため，「ヒル修辞理論」の「統一」では考察が文法的な面に偏らざるを得ないとともに，修辞理論の中で「統一」が中心的な位置にはなり得ないのである。これに対し，「佐々修辞理論」では内容面における統一を重視するとともに，文章全体についての統一を考え，文章の構成の段階において統一を考慮しなくてはならないことを指摘している。このように捉えられている「統一」が，「佐々修辞理論」において中心的なvirtueとなっているのは必然的な結果であろう。文章レベルでの「統一」は，ジェナングに見られるものであるが，その中でも特に『レトリックの実用的原理』では，テーマとの関わりから，思想面での統一を扱っており，[16]「統一」に関しても佐々はジェナングの影響を受けている可能性が高い。

② 文章の種類

「佐々修辞理論」では，文章の目的・描く対象により，Description（記述文），Narration（叙事文），Exposition（説明文），Argument（議論文）の四つの「文章」を規定している。（上の括弧内は佐々の訳語であるが，佐々もこれらの言葉をヒルと同様の定義のもとに使用している。）それぞれの「文章」は次のようなものである。

Description ――― 人物やものを扱う文章
Narration ――― 動作や事件を扱う文章
Exposition ――― 何らかの分析や説明を要する文章
Argument ――― 理解力に訴えたり，意志に影響を与える文章

「文章の種類」では，各「文章」ごとに，描こうとする対象の観察法と描写法が述べられているが，「スタイル」のような構文論的考察は少ない。ここでは各「文章」の性質を考察し，それぞれの描く場合のポイントを示した上で，各「文章」に応じて，対象の観察方法と描写の上での注意を示している。

「佐々修辞理論」では，「スタイル」での理論の省略・簡略化が目立ったが，「文章の種類」では佐々が「ヒル修辞理論」を補い，更に詳細な理論を組み立てている。たとえば，記事文において，対象の特徴を描くための技術を六つに類型化して示し，説明文では独自の考察から定義の重要性を指摘し，更に，定義の方法を七種類に類系化して示すなどの補足が行なわれており，また，叙事文では，観察点の重要性を強調するために，「ヒル修辞理論」とは異なる独自の構成を取っている。「文章の種類」では，この他にも多くの箇所で，加筆・整理が行われ，全体として「ヒル修辞理論」を更に発展させた形になっている。

「佐々修辞理論」において「文章の種類」が重視されていたことは，以上の点からも明らかであるが，更に佐々は，「文章の種類」の中の叙事文と記事文をそれぞれ，『新撰叙事文講話』（大正5年），『新撰記事文講話』（大正5年）として出版している。この二冊に述べられている理論は『修辞法講話』と酷似しているが，さまざまな文学作品からかなりの量の例文が引かれていることから，佐々はこの二冊の中で，「文章の種類」の理論による，実際の文章の分析を狙ったものと考えられる。佐々が「文章の種類」を重視していたことは，この二冊の存在からも裏付けられるであろう。

5.「佐々修辞理論」の位置づけ

ヒルとジェナングの修辞理論は，ともにカレント・トラディショナル・レトリックからコンポジションへの過渡期の理論であり，「ヒル修辞理論」をもとにした「佐々修辞理論」も，カレント・トラディショナル・レトリッからコンポジションへの流れの中での位置づけを考えることが妥当であろう。既に述べたように，カレント・トラディショナル・レトリックの目的が説得力のある表現であるのに対し，コンポジションでは正確な伝達，誤解されない表現が第一の目的である。コンポジションにも，第二の目的として伝える内容に応じた表現の作成があるものの，説得力のある表現までをその目的としてはいなかった。カレント・トラディショナル・レトリックとコンポジションの違いはこの目的に最も顕著に現れており，本節でも「文章の種類」と「スタイル」について，「佐々修辞理論」の目的の検討を行うこととする。

「文章の種類」は，ヒルが必要な情報を要領良く伝えるための技術を扱っていた箇所である。佐々は「文章の種類」を重視し，更に詳細な理論に作り変えているが，これはあくまでも「ヒル修辞理論」を補っているのであり，「ヒル修辞理論」の枠を超えるものではなく，「ヒル修辞理論」の場合と同様の目的の下に書かれていると考えられる。また，「スタイル」についても，大方は「ヒル修辞理論」と同様の目的を持っていると考えられるが，「スタイル」の中で佐々が独自の理論を展開させている「統一」に関しては，「ヒル修辞理論」の枠内に収め切ることができず，「統一」は「ヒル修辞理論」とは異なった目的の下に置かれている可能性が強いため，この点を検討しておく必要がある。

「統一」において，ヒルが文の内部での統一を中心に論じているのに対し，佐々は文章全体の統一を考え，一つのテーマに向かって文章全体が有機的に結び付く事の重要性を論じているが，これは単に要領良く伝えることに留まらず，説得力のある表現まで志向するものであり，佐々が彼の修辞理論の目的と考えていたのは，「ヒル修辞理論」に述べられているような描写の技術だけではなく，説得力のある表現を作るための技術までも含んでいた可能性が高い。説得力のある表現はカレント・トラディショナル・レトリックが目的としていたものであり，この場合，佐々は「ヒル修辞理論」をより古い形に戻そうとしていたことになる。しかし，説得力のある文章を目的とした場合，「構想」や読者（聴衆）の心理への配慮など，「ヒル修辞理論」では論じられていなかった分野をその修辞理論に含める必要が出てくる。佐々も，この二つを扱っているジェナングの修辞理論などから，この点に気づいてはいたであろうが，「構想」はそれだけで西洋修辞学の一領域を形成する大きなテーマであり，佐々はこれを彼の修辞理論に含めるまでには至っていない。また，読者の心理への配慮も「文章，言語はこれを読む人，聴く人の心理状態に適応しなければ効果に乏しい」[17]と述べて言及しているものの，ヒルが扱っている以上には，この問題を彼の修辞理論に取り入れてはいない。つまり，佐々は彼の修辞理論の目的として説得力のある表現を考えていた可能性が強いが，結果的に，彼の修辞理論は説得を目的とするものとはならなかったのである。彼が説得を目的と考えた背景には，ジェナングなど，ヒルよりも古い形の修辞理論の影響が強いものと考えられるが，そのためには「ヒル修辞理論」を大幅に変更する必要があり，結果的に「ヒル修辞理論」を説得を目的とした理論に作り変えるには至らず，全体として

「佐々修辞理論」は「ヒル修辞理論」の改良に留まったのであろう。ただし，このことは「佐々修辞理論」が「ヒル修辞理論」と同地点に位置づけられることを意味するものではない。次に佐々の改良の跡を検討してみたい。

カレント・トラディショナル・レトリックで重視されていた「スタイル」は，コンポジションでは軽視されあまり扱われなくなるが，[18] この点で，「スタイル」を重視した「ヒル修辞理論」は，カレント・トラディショナル・レトリックの特徴を強く残していると言える。「ヒル修辞理論」での「スタイル」は，そこで使用されている用語から，18世紀イギリスの修辞学者であるホエートリー（Whately, Richard）の影響が大きいものと考えられる。[19] ホエートリーの修辞理論の中では，「スタイル」が大きなウェートを占めており，ヒルが「スタイル」を重視しているのもホエートリーの影響であろう。ホエートリーは「スタイル」において描く内容を問題としており，内容の整理・配置によってvirtueを得る方法を論じているが，「ヒル修辞理論」では描く内容をその対象から外しているため，ヒルの「スタイル」では専ら文法が問題とされた。「ヒル修辞理論」のこの点が文法偏重という欠点を招いたことは，既に述べたとおりである。描こうとする内容よりも，それを表現する方法，特に文法を問題とするのは，コンポジションと共通する特徴であり，また，「スタイル」を重視するのは18世紀イギリス，特にelocutionary movement[20] と呼ばれる修辞学の特徴である。つまり，「ヒル修辞理論」の「スタイル」は古い修辞理論の構成で新しいコンポジションと同じ対象を論じているわけであり，「ヒル修辞理論」の文法偏重という欠点は，究極的にはここから生じている問題なのである。佐々が，彼の修辞理論において，その中心を「文章の種類」に移し「スタイル」のウェートを軽くしたことは，文法偏重という「ヒル修辞理論」の欠点を緩和しただけでなく，このギャップを少なくし，よりコンポジションに近い理論を作ったことを意味しており，この点で佐々は，「ヒル修辞理論」をよりコンポジションに近付けていると言うことができる。

「佐々修辞理論」は「ヒル修辞理論」の枠を越えた理論ではなく，「ヒル修辞理論」を改良した理論と見ることができるが，その改良によって「佐々修辞理論」はよりコンポジションに近付いたと言える。「ヒル修辞理論」は個性的な理論であるが，文法偏重などの欠点があった。この欠点は，過渡期の理論という時代背景から生まれたものであり，それを緩和するためには，古い形に戻すか，コンポジションに近づけるかいずれかの処置を取らねばならず，佐々はこのうち後者の処置を行ったのである。佐々の意図としてはカレント・トラディショナル・レトリックに近付けようとしていた可能性が強いが，「ヒル修辞理論」の改良から生まれた「佐々修辞理論」ではヒルの枠を超えることができず，「ヒル修辞理論」を洗練させた結果，コンポジションに近付いたのである。「佐々修辞理論」がこのような性質を持つのは，ある程度必然的であるとも言えるが，それは何よりも，佐々が「ヒル修辞理論」の特徴とその問題点を的確に見抜いていたことを示すものであろう。

［注］

1）佐々政一（醒雪）は，東京帝国大学を卒業して以来，旧制第二高等学校，山口高等学校，東京高等師範などで二十数年間にわたり作文を担当しており，この長年の実践経験がその修辞

理論にも大きな影響を与えている。

2）森岡健二『文章構成法』（昭和５６年　至文堂） pp. 380−384，滑川道夫『日本作文綴方教育史１ 明治篇 』（昭和５２年　国土社） pp. 324−344，早水博司「修辞学研究ノート」(1)（『鷹』９号，１９７０，東京都立三鷹高校図書館）など

3）『新撰記事文講話』（大正５年　育英書院），『新撰叙事文講話』（大正５年　育英書院），『中学作文講話』（大正６年　明治書院）

4）西洋修辞学の領域は伝統的に次の五領域に分けられている。

① inventio	「構想」	説得に必要な材料と方法を見付け出す技術
② arrangement	「配置」	内容の配置を扱う技術。パラグラフ論など。
③ elocutio	「修辞」	思想を言語化する技術。
④ memoria	「記憶」	弁論を記憶する分野。
⑤ actio	「所作」	発音や身振りを扱う技術。

括弧で示したのは訳語であり，本稿ではこの訳語を使用する。ただし，混同をさけるため，elocutioのみエロクーティオーと記述する。

5）Allen, R. R., "The Rhetoric of John Franklin Jenung", *The Speech Teacher*, 1963
また，ヒルは，アメリカで最も権威のあるレトリックの講座である，ハーバード大学のボイルストン・プロフェッサーシップ(Boylston Professorship)の教授であったが，ヒルが退官した後，ボイルストン・プロフェッサーシップは閉鎖され，作文教育を担当するフレッシュマン・イリッシュ（freshman English）に吸収されている。

6）Paul C. Rodgers, Jr., "Alexander Bain and the Rise of the Organic Paragraph", *The Quartery Journal of Speech*, December, 1965

7）Corbett, Edward P. J., *Classical Rhetoric for the Modern Student*, 1971, p, 626

8）Corbett, Edward P. J., "What is Being Revived?", *College Composition and Communication*, 18, 1967

9）「ヒル修辞理論」と「佐々修辞理論」ではstyleという語は用いずにrhetorical excellence（修辞的洗練）という言葉を使用しているが，その内容は，西洋修辞学において伝統的にstyleと呼ばれている分野であり，本稿でも「スタイル」と呼ぶことにする。

10）佐々は彼の修辞理論を展開するに当たって，「ヒル修辞理論」を日本語に合うように変更すること，「ヒル修辞理論」の整理(あるいは補強)をすることの二つを行っており，「文法」に関してもこの二つの処置が見られる。しかし，「ヒル修辞理論」の「文法」では，使用すべき語彙，接続詞・代名詞の用法，テンス・アスペクトなど構文論に関する注意などが述べられており日本語への適合が難しいため，日本語への適合という点ではあまり成功しているとは言えない（特に構文論に関する面）。ただし，理論の整理という点では，複雑過ぎる「ヒル修辞理論」を整理することにかなり成功しており，また，語彙に関しては，母国語観の違いから「ヒル修辞理論」には見られない独自の考察が行われており，特に，汎語と殊語の用法などに優れた考察も見られる。

しかし，「文法」に関してカレント・トラディショナル・レトリックとコンポジションではあまり違いがなく，「ヒル修辞理論」の「文法」もこの枠から出てはおらず，更に，佐々が改良を加えた「文法」もこの枠から出るものではない。つまり，「文法」に関しての検討は，「佐々修辞理論」の位置づけを目的とした本稿では意義を持たなくなり，本稿では「文法」の検討を外すこととする。

11）「ヒル修辞理論」では「スタイル」を語彙，文，段落，文章の四つのレベルで論じているのであるが，virtueの対立関係はそれぞれのレベルによって変わってくるためvirtueの対立関係についての考察は複雑なものと成らざるを得ないのである。

12）佐々政一　『修辞法講話』 p. 123

13）佐々政一　『修辞法講話』 p. 121

14）Genung, John F. op. cit. *Pracical Elements of Rhetoric*, p. 25

15）佐々政一　『修辞法講話』 p. 154

16）Genung J. F. op. cit. *The Working Principles of Rhetoric*, pp. 421－448

17）佐々政一　『修辞法講話』 p. 4

18）カレント・トラディショナル・レトリックで重視されていた「スタイル」が，コンポジションで軽視された原因については余りはっきりした説明がなされていないが，次のような理由が考えられる。伝統的な「スタイル」ではvirtueの中でも，時と場合への適合というvirtueが特に重視されていたが，この点に見られるように，「スタイル」は本来，説得のための技術である。しかし，コンポジションでは正確な伝達が第一の目的となったため，「スタイル」の意義が薄れたのではないか。また，従来の「スタイル」では内容の整理・配置によってvirtueを得る方法を論じていたが，内容を扱っていないコンポジションでは文法から論じるしかなくなり，ヒルに見られたような欠点を招いてしまうこと等が，理由として考えられる。

19）ヒルはclearness, force, easeの三つのvirtueを挙げているのに対し，ホエートリーのvirtueは，perspicuity（明晰さ），vivacity（活発さ），beauty（美しさ）の三つであり，両者の用語が酷似していることから，ヒルの「スタイル」はホエートリーから強い影響を受けていると考えられる。

20）elocutionary movementは，イギリスの四つの修辞学の系統のうちの一つであるが，西洋修辞学の五領域の中の「構想」とエロクーティオーを合わせた部分（これはelocutionと呼ばれる）を対象とする修辞学であり，18世紀イギリスを代表する修辞学である。先に挙げたホエートリーも，このelocutionary movementに属する修辞学者である。